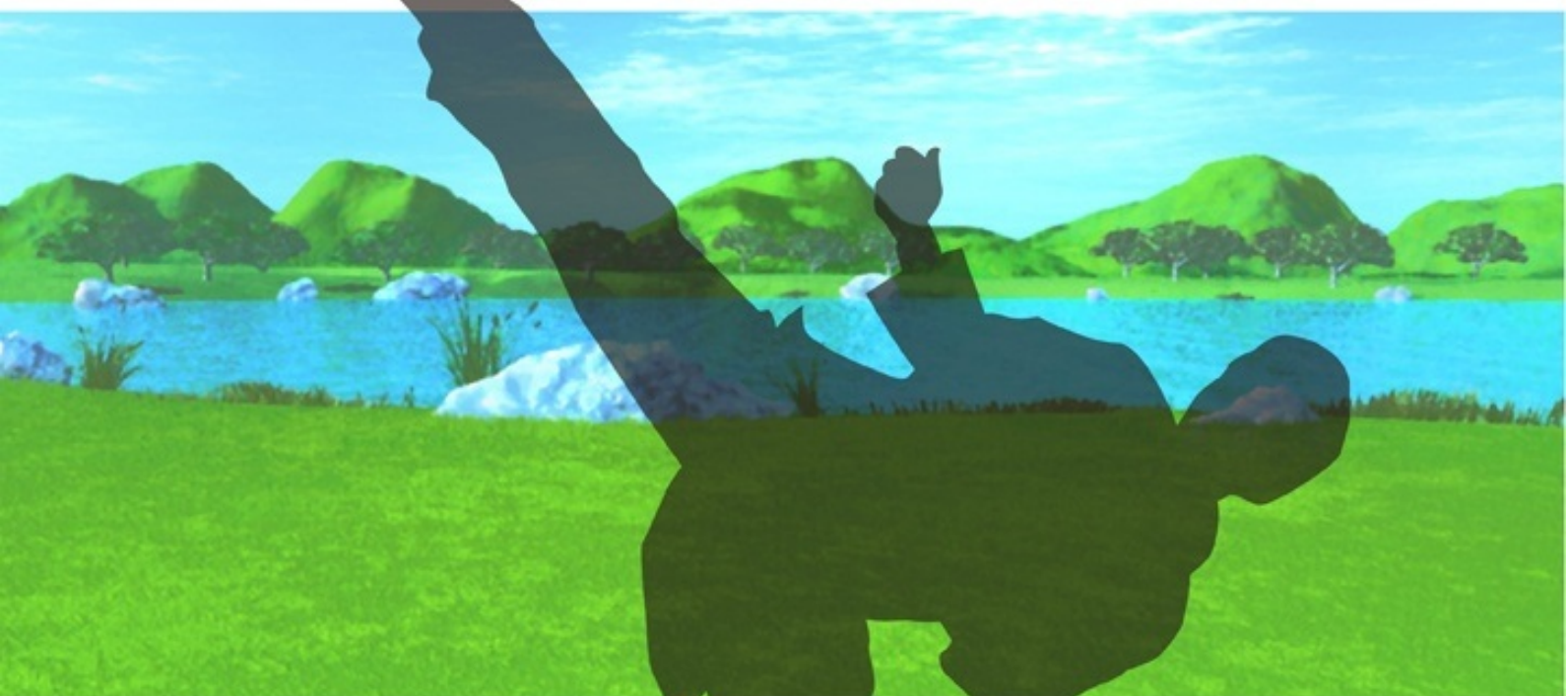


ハツガンの伝説の泉



望月 俊弘



## ハッサンの伝説の泉

---

若き熱血漢ハッサンは、町の広場を見降ろす橋の上から大いに夢を語った。

「皆、聞いてくれ俺はいつか魔王と闘って勝つんだ！ヒーローになるんだ!! 絶対だ！でも、その前に説得せねば！それが一番の問題なんだ。うーむっ」

町の人々がニコニコと微笑みながら、それを耳にしている。町で一番の巨漢にして力持ちの若者ハッサンだけに、ちょっと期待を持たせられるが、すぐにそんな自分に苦笑する皆々であった。

身の丈二m十Cm、目方百六十五Kg、百m走八秒台ジャスト。凄い、凄い。瘤の如き筋肉が、体中にボコボコと盛り上がっている。ちょっと期待させるだけの事はある。

「——なっ！いいだろ。可愛い子には旅をさせろって言うしな」

ハッサンは、武骨な声で媚びたようなお願いをした。問題視していた父親にである。

「駄目だ」

有無を言わせぬ響きであった。

「オヤジは、何時も何時もその一点張りだ。俺の言う事にちっとは耳を貸してくれってんだ」

「お前と議論するつもりは無い。駄目なものは駄目だ!!」言い放つなり、父は背を向けて黙り込んだ。こうなるともう何を言っても無駄であった。

部屋の外で立っていた母が手招きしてこう言った。

「ちょっとこっちに來なさいハッサン。——あのね、ああは言ってもね、お父さんはあなたの事をよく考えていらっしゃるのよ。

子供が可愛くない親なんてそんなにはいないわ。ハッサンは自分の父をその例外の方だと思うの？なぜ駄目なのか考えてみなさい。

わたしだって駄目って言いたいのよ。ハッサン、これはとても現実的な問題なのよ」

「俺に一人前の大工になって欲しいって事で駄目なんだろう」ハッサンは鼻息を荒くして「そんな事と魔王をやっつけるのと、どっちが大切だっていうんだ!!」

母は顔面蒼白になって「命を落とすかもしれないのよ…。わたしも、お父さんも、可愛い可愛いハッサンとずっと一緒に暮らしていきたいの。ねっ、分かるでしょ、分かっただろうかいハッサン」と心配を絵に描いた顔で言った。

母の目が序々に潤んできたのが辛くてハッサンは顔を背けた。

「バカタレ！」ハッサンの父が現れて言った。「母さんを泣かす奴があるか!! わしが死んだら誰が母さんを守るんだ。だいたい無神経で自分勝手な奴に世界が救えるものか。魔王をやっつけた結果どうなるっていうんだ！」

「俺がヒーローになって、世界中が平和になるんだ」

まずはお前がヒーローにか？ふんっ、まあいい、そんなにヒーローになりたきゃここを出て行け。夢なんだろう…。まあ…、まあなあ、挫折して大工になりたきゃ帰ってきてもいいんだけどよ」これが父の精一杯の愛情表現であった。

くるりと背を向けた父の背中が、いつになく小さく見えた。大工職人のそれには思えない。それがハッザンの旅立ちの決意を鈍らせた。

——そうだ！ 北の森深くに伝説の泉があると人伝てに聞いたことがある。一体例の、斧を落として正直に返答すれば金の斧が手に入るっていう泉の事なのだろうか？ 金の斧さえ手に入れば、大工の仕事をしなくとも、両親は食ってゆけるだろうから、安心して放浪の旅に出れる。

なんだかワクワクして来てじっとしていられなくなってきた。早速、薬草とモドリの翼、そして鉄の斧も忘れずにハッザンは夜明けを待たずに町を出る事にした。

——後から声が掛った。

ハッザンの母が、大きなおにぎりを何個か持って秋風の中、心配そうな顔を固まらせて走り寄ってきた。そして胸の内を語る。

「ハッザンや、母さんはね、魔王を打倒するのは必ずしもハッザンじゃなくてもいいと思うの。それでも目的は達成する訳でしょ。だから、他人がヒーローでも彼をたたえる位の人間としての成長が欲しいわね。ヒーローを夢見るばかりに焦っちゃわないで、足元に注意して一歩ずつ確実に進むのよ。でもね、親バカかもしれないけど、これだけは言えるの、勇者様一行と一緒に、ウチの子は誰にも負けない働きをする、ってね。だからって訳じゃないけど母さんも子離れしなきゃね。それから、大工仕事だけが生き甲斐になったお父さんだけど、わたしとハッザンをしっかり愛してくれてるのを何時も忘れないでね。——はい、お弁当よ——」

「——あんがと。ちよっくら行ってくらあ」

ハッザンは母に背を向けると、ぼそっと呟く 「ちよっくらな」

そしてハッザンは暁と共に旅に出た。

ハッザンの鼻先を、黄金のつむじ風が吹いた。

落葉を照らして、朝日が風を金色に染めあげる。

森の入口に、ハッザンは佇立していた。

いかにハッザンが豪傑であろうと途方に暮れるのは、いたしかた無い。

この森林のいずこかにあるという「伝説の泉」。

地図も手掛かりもまったくなし。

ところで、この辺りの樹木は、すっかり人間に浸食され、切り株をそこあそこに見受けるにとどまる。

そういう訳で、この一帯は安全な地域かと、ハッザンは判断した。

ところが、そんな訳にはいかなかった。

手頃な株に座っておにぎりにかぶりつこうとしたら、突然、下から切り株小憎が出現したのであった。

いや、出現したと言うより、ハッザンは切り株小憎の上に腰を下ろしていたのだ。

切り株小憎は「小魂属」で、古い切り株に宿った精霊である。見た目は、切り株をかぶったワンパク坊主と言った感がある。魔力を帯びた小枝を振り回して攻撃して来る。森の木を切る者を憎んでいる。

森の動植物やモンスターを味方にする。それから風を巻き起こしたりも出来る。自分も風と共に転がって移動する事が可能である。そして、何より森を愛している。

まともに戦ったらハッザンにはとても敵わないが、森の中を誰よりも知りつくしている。

...そんな感じの切り株小憎の出現にハッザンはびっくりして飛び上がり、おにぎりを落としてしまった。そのショックもあり、先制攻撃を許してしまう。

「おーい、みんなあ、こいつ斧もつとるぞお。森を荒らす不届き者だぞお」

グリズリーがあらわれた。

人面樹があらわれた。

大ガラスがあらわれた。

グリズリーは後足で立ち上がっている。自分と同じ位の量感を持った肉体だとハッザンは思った。こいつから倒さねば—— 「足払い」、右の足は空中にグリズリーを浮かせて左に降りる。そのまま振った体勢から「きゅうしょづき」、一連の動きからグリズリーをはじき飛ばすように出した右肘は、グリズリーの心の臓に直撃した。更に肘をひねっての裏拳が顔面に叩き込まれる。

——グリズリーを倒した。

切り株小憎は、「ルーズニ」を唱えた。ハッザンの守備力が半分位に落ちた。人面樹の右枝がハッザンの首を背後から絞めつけた。大ガラスは、人の頭骸骨を三十m頭上から落とした。正確に脳天を強打した。ルーズニの魔法が効いているハッザンは、流石に脳震蕩を起こした。体の力が抜ける。

ハッザンは、戦闘不能状態になった。

人面樹はハッザンの首に更に左枝もそえて両枝で絞め上げた。切り株小憎は、魔法の小枝を振ってハッザンに光線をぶつけた。大ガラスは、骨を再び持ち上げて飛んだが無駄足を踏んだ。ひびの入った頭骸骨は、ポロポロと分解した。

苦闘の中覚醒したハッザンは、もう一度か二度攻撃をうけたら御陀仏だと言う事が判った。腰から鉄の斧を抜き、人面樹の両枝を斬り落とした。素速く「身交わしステップ」、これで軽快な足捌きで、敵の攻撃を交わし安くなった。

大ガラスが耳を劈く大声で鳴いた。ハッザンはビビらなかった。人面樹が足で攻撃した。ハッザンはなんなく交わした。しかしながら光線となると話は別である。光の速さは凄いので狙いが良ければ必中だ。しかし、切り株小憎の狙いは御世辞にも正確とは言えない。それが——当たったのだ！ 人面樹に!! ハッザンは、鈍い人面樹の裏に足を活かして逃げ込んだのだ。

ハッザンは、人面樹に、止めの「正拳突き」、顔面を狙った突きは、“痛快の一撃”となり、人面樹に何本もの亀裂がミシミシと音をたてて走った。続いて「跳び膝蹴り」、でハッザンは大ガラスに倒す為に充分な一撃を与えた。

——人面樹を倒した。

——大ガラスを倒した。



ハッザンが、「かまいたち」、を放つのと、切り株小憎が、小枝を振るのは、ほぼ同時だった。小枝が折れた。そして光線はハッザンに命中した。ルーズニの効果が消えていなければ、ハッザンは死んでいる所であった。ともあれ、大急ぎで切り株小憎を捉まえた。基本的に魔術師なので魔法の杖たる小枝を失った今は予想通り従順だった。

「すみません。すみません。聞きたいことなんでも答えます」

「じゃあ伝説の泉の場所はどこだ？」

ハッザンは薬草を傷口に塗りながら訊いた。

「伝説の泉？ ココロミの泉の事で？」

「まあそんな感じかも知れんな。連れて行け！」

——二人はココロミの泉まで辿り着いた。

ハッザンは早速鉄の斧を泉に投げ入れた。

釣り糸をたらしめた様な気分だった。

すると...ゴボゴボゴボッと沸き立つ水面から奇妙な青い衣を身にまとった知的な壮年の男性が序々に姿を現した。そして静かに言った。

「探しものか？」

「おう。金の斧じゃなくて鉄の斧なんだけどな」ハッザンがしたり顔で言った。

「ほら、これであろう」泉の精は鉄の斧をハッザンに渡した。

ハッザンが口をぽかんと開けてる内に、満足げに泉の精は去って水面に波紋も消えた。

しばし黙考したハッザンは、再び斧をココロミの泉に投げ入れた。

「またあんたか...。探しものは？」再び登場した泉の精は言った。

「とにかく言える事は、一番価値のある物を落したってことよ。そいつを俺に渡してくれればいい！」とんでもない事を言い出した。

「誰にとってだ？」泉の精は問う。

「オヤジにとってだ」言葉を交わした時、ハッザンは頭の中がスカッと痺れた。

「一つ言って置くが、私は人の心が見える。

お前は勘違いをしている。——何故父にとって金の斧より鉄の斧が大切なのか分かったら金の斧も出すから好きな方をもって去れ」

ハッザンは記憶の中の父の言葉の端々から、金や仕事の考え方が人と違うと発見した。なんでもって——オヤジの夢かな。頭の中がスカッと痺れた。

ハッザンはなんと金の斧を持つと、モドリの翼で町へ帰ってしまった。

泉の精は、切り株小憎に言った。「金の斧を売って鉄の斧を買い、残金を放浪の旅に使う積りだそうだ。何にせよ、奴程の正直者はいないな、上にバカがつくけれどもなあ」

——ハッザンの冒険は始まったばかりです。

## ハッサンの伝説の泉

<http://p.booklog.jp/book/58562>

著者：望月俊弘

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/mochizuki-toshi/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/58562>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/58562>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ